



▲ 震災直後（写真2）



▲ 震災前（写真1）



▲ 解体後（写真3）

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録 (23)0038号

震災被害を受けた区内の文化財 3月11日、午後2時46分に起きた大震災は、東日本に甚大な被害をもたらしました。被害の状況は、大きく報道され、義援金や物資の寄付に応じた方もたくさんいらっしゃるでしょう。被災地の文化財の被害も深刻で、多くのボランティアが現地で文化財の救出と修復に当たっているそうです。この日、東京の多くの文化財も地震の被害にありました。神社の庚申塔は残念ながら復旧が不可能なほど粉々になってしまいました。

南千住駅前のお地蔵さんが消えた!?さて、震災後の3月中旬頃から「南千住駅近くの大きな石のお地蔵さんの姿が見えないけれど何かあったのか?」といいう問い合わせがよく来るようになりました。そのお地蔵さんは、寛保元年（二七四二）8月銘のある、地元の方からは延命地蔵さんと呼ばれている延命寺所蔵の「小塚原の首切地蔵」（区指定有形文化財・歴史資料）のことです（写真1）。問い合わせが相次ぐのは必定。何しろ、首切地蔵さんは、南千住の歴史を語るのに欠かせないシンボル的な存在であり、風景の一部なのですから。

あの日のお地蔵さん　お地蔵さんは、二度の揺れにより、左側の腕が落下さい。胴体部分が大きくずれてしましましたが、何とか持ちこたえていました（写真2）。しかし、余震がまた来れば、倒壊し隣接の建物ばかりでなく、近くにいる人にも被害が及びかねない状態でしたから、一週間後の17日に本体の解体作業を行いました。そのため台座のみになっているのです（写真3）。

お地蔵さんは、いくつかの花崗岩のブロックを組み合わせてできています。花崗岩は御影石ともいわれる堅く重たい石材で、解体工事は、巨大なクレーンを使い、熟練した作業員さんによつて行われました。台座の周りに、バラバラになつた頭部や胴体、脚部などが並べられており、その様子は、震災の深刻さを物語っています。

新たな発見　解体を進める過程で、お地蔵さんの胎内から様々なものが出できました。それは①火葬骨②銭③一字一石経（写真4）等です。①は、1体分は残つていませんでしたが、明らかに人骨です。②は28点、主に寛永通宝や文久永宝で、その他10円玉や100円玉等の現代の硬貨も見つかりました。

③は 62 点、小石に「南」「妙」「蓮」などお経の文字が墨で書かれ、法華経の文字を石の表裏に書いたものと思われます。また、首切地仏と言わされてきましたが、本体 25、台座 8 個の花崗岩のブロックからできていることが判明しました。当然ながらこのことは、解体工事がなければ分からなかつたことで、お地蔵さんが身を挺して現代人に何かを伝えてくれているようですね。

災害とお地蔵さん　お地蔵さんは、時として水害の際にスケール代わりとされていました。文政 6 年（一八二三）には、膝の上まで、弘化 3 年（一八四六）には肩まで水が来たと「武江年表」に記されています。言うなれば、首切地蔵さんは、災害の度合いの指標となつていています。安政の大震災、関東大震災等これまでの震災で被害を受けたという記録は見当たりません。今回の地震によるお地蔵さんの被害は、将来、新たな指標として語り継がれるかもしれません。

お地蔵さんは何故作られた?　首切地蔵さんは、小塚原仕置場の刑死者や行き倒れの人など、無縁の供養のために作られたと言われています。それが、小塚原刑場に安置されたお地蔵さんの役目でした。

台座には、願主である淨心、淨財を寄進した江戸の人々の名、それに「大坂西横堀住 石工 中村屋半兵衛」と刻まれていて、お地蔵さんの造立に大坂の石工



▲ お地蔵さんの胎内から出た一字一石經 (写真4)

が関わっていたことが分かります。ところで、台座の正面には「天下泰平」「国土安穏」「奉納經」の文字があることをご存知でしょうか。この「經」とは、「法華經」のことと言います。また「天下泰平云々」の銘文は、六十六部廻國供養塔等に刻まれる言葉として知られています。六十六部廻國供養塔は、全国 66 カ所を巡礼し法華經を書きして納めた時に建てられた石塔で、全国各地に見られます。これまで、この銘文について言及されることはありませんでした。今回、一字一石經が発見され、法華經と思われる文字が確認できたことにより、お地蔵さんの造立に法華經の信者が関わっていた可能性が見えてきました。お地蔵さんの前には、元禄 11 年（一六九八）銘の題目塔（区登録有形文化財）があります。大正時代までここにあつた法華庵の存在からも、法華經信者が小塚原刑場の無縁供養に関わっていたことが窺えます。

仏像造立にあたっては、死者を追善供養するため、胎内に骨片・遺髪・歯などが納められることがあります。胎内から火葬骨が確認されたことで、誰かの追善供養のための造立であつた可能性も視野に入れて調査する必要性が出てきました。

再建に向けて 南千住では、延命寺さんと町の皆さんにより、お地蔵さんの復旧を目指して募金活動が始まられたそうです。区教育委員会では、お地蔵さんが残した大切なメッセージに耳を傾け調査研究を進めるとともに、一日も早く元の姿を取り戻すよう、技術・経費など様々な角度から支援していくたいと思います。

（野尻かおる）

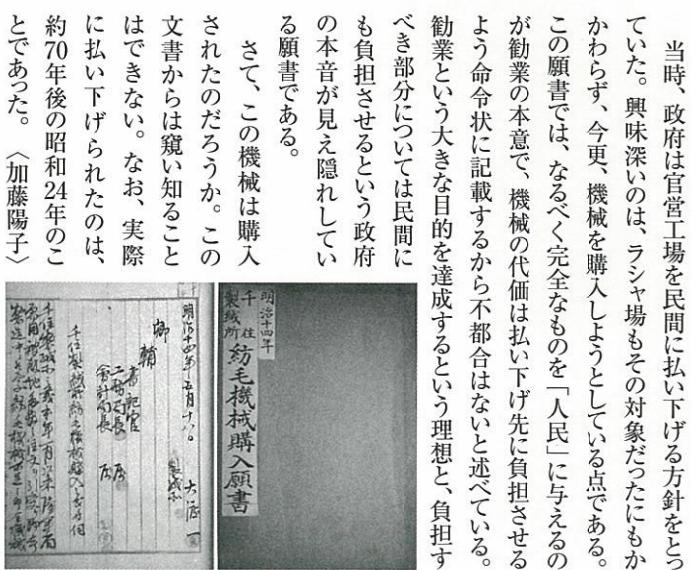
『参考文献』『隅田川とその両岸 補遺上巻』（昭和 46 年、芳洲書院）、『杉田玄白と小塚原の仕置場』（平成 18 年、荒川ふるさと文化館）他。

ラシヤ場とは、明治 12 年（一八七九）に南千住六丁目に創業した官営のラシヤ（毛織物・製造工場、千住製糸所のこと）である。今回紹介する資料は、そのラシヤ場に関する「紡毛機械購入願書」である。わずか 8 頁の資料だが内容はなかなか濃い。

願書によれば、明治 14 年、ラシヤ場は各種ラシヤを生産し、中でも陸海軍及び巡査などの制服地を多く製造していた。しかし、紡毛用の機械が不足していたため、十分な生産ができなかつた。そこで、紡毛機械を 2 基購入したいと太政大臣に願い出ようと作成されたのがこの文書である。

（5）

ラシヤ場の 大きなお買いもの



地名のやさしき

(11)

かんむりしんどう かんむりまち
冠新道と冠町



現在の冠新道（明治通りから西を望む）

冠新道の名前の由来 西日暮里六丁目を東西に横断する「冠新道」と呼ばれる道があります。この道は明治通りから尾久橋通りを経て JR 東北本線ガード下まで至ります。

地元の人にはおなじみの商店が立ち並ぶ街並みですが、この冠新道、そもそもなぜこのような名前がついたのでしょうか。

実は、冠新道の「冠」は江戸時代に新堀村の名主を務めた冠家の名字に関係しているのです。冠家は、今の西日暮里地区に多くの土地を所有していた大地主で、近代には冠権四郎氏が日暮里町の助役を務めるほどの地域の有力者でした。

冠権四郎氏は、大正 5 年（一九一六）に現西日暮里六丁目の辺りの所有地を区画整理して、冠町一～三丁目と名付けました。

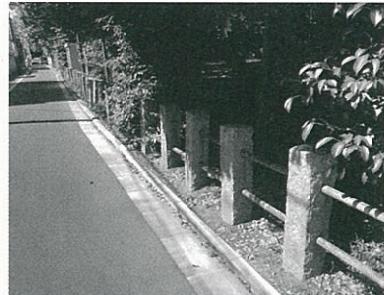
その際、同時に道路を新設したのですが、これが冠新道だったのです。つまり「冠町の新しい道」が、文字通り、冠新道と命名されたわけです。

幻の冠町 さて、道の由来の謎が解けたところで、道の名前の元になつた冠町について、もう少し詳しく見てみましょう。

現在では聞きなれない冠町という地名ですが、実は大正 14 年の地図「東京府下三河島町日暮里町全図」を見ても、その一帯は、字「木ノ下」・「中道」・「片瀬」



冠町一丁目親交會が奉納した玉垣



諏方神社の玉垣（道路側）

玉垣の銘文には「御大典記念」に奉納されたとともに、おそらく昭和 3 年（一九二八）の昭和天皇即位を祝しての奉納だと考えられます。少な

里（三丁目）境内に残つているのです。
冠町の記憶 諏方神社の西側の道路に沿つて建立された玉垣の銘文の奉納者を見ていくと、その中に「冠町一丁目親交會」や「冠三同志會」や「冠三丁目有志」というものがあり、かつて冠町にあつた団体だと思われます。『日暮里町史』によれば、冠町一丁目親交會は、大正 13 年に「冠新道全般の親善並に向上發展」

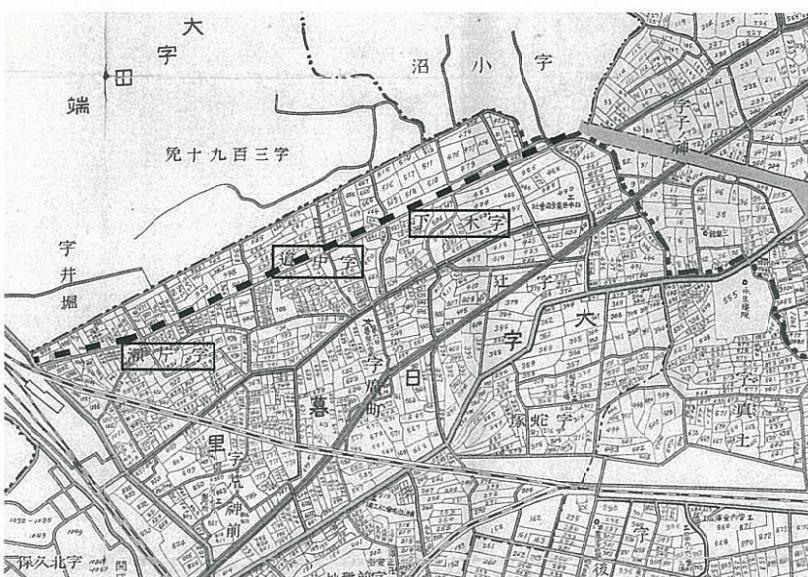
とあるのみで、冠町を見つけることができません（地図参照）。どうやら、この冠町、公式な地名ではなく、地主であつた冠権四郎氏が区画を整理した際に、私的に命名した通称のようです。そんな訳で、冠町は当時の地図にすら見当たらぬ通称であつたため、その範囲も、冠新道を含む現西日暮里六丁目一帯をそろへんでいたらしいということぐらいしかわかつてないのです。

しかし、この幻の地名の痕跡が、諏方神社（西日暮里三丁目）境内に残つているのです。

くとも玉垣が奉納された昭和の初めぐらいまでは、冠町を冠称する団体が存在し、冠町という通称が地元に根付いていたことなのでしょう。実際、昭和 11 年の『荒川区史』にも「冠町聯合」という連合町会名が確認できます。

今日、かつて日暮里に冠町と呼ばれた場所があつたことを知る人は徐々に少なくなつてきています。しかし、冠町の記憶は、冠新道の名称や玉垣の銘文とともに、ひつそりと地元に生き続けているのです。

参考文献』『荒川区史』（昭和 11 年）、『荒川区土木誌』（昭和 46 年）、『日暮里町政沿革史 付、日暮里町史』（文化館ネックス・郷土史③）など

「東京府下三河島町日暮里町全図」（部分） 大正 14 年 当館蔵
(※字名は□で囲んだ。太い破線は冠新道と推定される箇所。)

中の川の土荒(7)

堅穴住居のくらし —ワンルームで家族団らん—

荒川区では文化財保護法に基づいて、埋蔵文化財の調査を行っています。

最近の調査成果として、西日暮里三丁目から弥生時代の住居跡の一部が確認されました（『荒川ふるさと文化館だより』25号3頁参照）。断片的な情報ですが、当時、荒川区に住んでいた人々の生活の様子が窺える立派な資料といえます。今回は、この資料を3つの視点から検証し、弥生時代の台所事情を探つていただきましょう。

住まいから探る—見つかった住居址—

弥生時代の住居は、堅穴住居と呼ばれる住まいが主流です。堅穴住居とは、地面を掘り下げて床を作り、柱を立てて屋根で覆った住居のことをいいます。家の間取りは1階建てで、基本的に部屋も1部屋です。現代で言うところの「ワンルーム」の間取りがごく一般的でした。残念ながら、今回の発掘調査で見つかった住居跡は、約50cm四方と狭い面積の調査でした。この時代の住居は一般的に一边が6m位のものが多いことからも、ごく一部の範囲しかないことがわかります。しかし、幸いにも住居の設備の1つである「炉跡」が1基確認できました。この炉とその周りは現在の台所に当たります。台所事情を考える上で重要なこの炉跡を、次の項目で詳しく探つてきます。

炉は住居跡の内部などにみられる火を燃やすための装置で床面を掘り下げる作られています。収穫してきた食材を調理するだけでなく、部屋を温める暖

房として、夜の暗闇を照らす照明の代わりとして使われていました。当時の人々にとって、日々の生活に欠かすことの出来ない大事なモノでした。そのため、多くは住居内の中央付近で確認されます。弥生時代の人々は、炉の周囲に集まって家族団らんの時間を過ごしていたのかもしれませんね。

西日暮里三丁目で発見された炉は北側が調査対象地外に続いているため全体を確認することは出来ませんでした。ただ、周りの土が熱を受けて赤く酸化しており、炉の中から弥生土器も出土している事から当時の生活の中で使用されていた事が窺えます（写真1）。

生活から探る—弥生時代の食生活—

弥生時代の人々は、実に多彩な種類の食事を食べていました。大陸から伝わってきた稻を含む農作物、狩りや漁労で手に入れた動物の肉や魚などが挙げられます。水稻耕作のために利用された水田の跡や植物の種、動物の骨などが見つかっており、遺跡から発見されている考古資料を元に当時の食生活が復元されています。区では、具体的な食料に関する資料は弥生時代の遺跡からは見つかっていませんが、今後の調査の中で区内からも発見される可能性はあります。

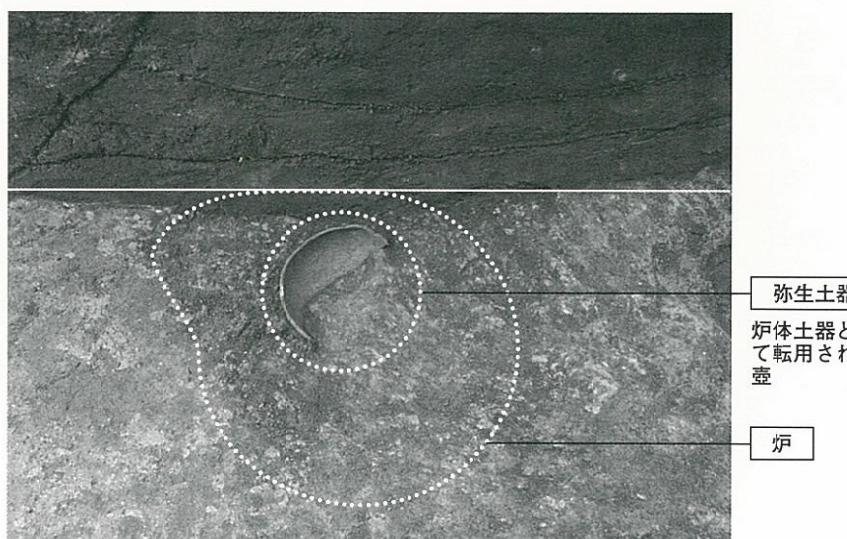
土器も目的に応じた形が作られるようになり、利用されるようになります。モノを調理するための「甕」、物を盛り付けるために使つた「高杯」や物を蓄える「壺」などがあります（写真2）。

今回見つかったモノから、堅穴住居のくらしを少し垣間見てみました。これらは、西日暮里三丁目に古くから人々が住んで生活していた証であり、同じモノは二つとないかけがえのない文化財です。近年、区内からは埋蔵文化財の発見が増えています。荒川区の原始の歴史を紐解くためにも、今後の調査に乞御期待！

（宮部俊周）



(写真2)
昭和29年に道灌山遺跡から出土した弥生土器



(写真1)
西日暮里三丁目から検出された炉と弥生土器

「包蔵地」としての諏方神社

台地にある諏方神社 西日暮里三丁目の地形は、上野台地の一部と台地の斜面部からなる。

この台地上にある諏方神社は、区内の小学生が社会科見学で必ず訪れる場所である。高台からは JR 西日暮里駅や線路、荒川区内の街並みを見渡せ、眺望の良さは江戸時代から有名であり、「諏訪台」と呼ばれていることは皆さんご存知の通り。低い土地がほとんどの荒川区の中でも、土地の高低差があることを体感できる唯一の場所でもある。

諏方神社の地面には何が？ 同神社の境内には、誰もがつい見上げてしまうほどに大きい銀杏の御神木がそびえ立っている。また他にも本殿や文化財になつてゐる石造物など見所が多い。しかし、神社を訪れて、その境内地の下、つまり地下に注目したことはあるだろうか。

先日、同神社を訪れた際、ここが昔から知られていて、その境内地の下、つまり地下に注目したことはあるだろうか。

諏方神社は、現在、包蔵地の一部として周知されているが、実際に発掘調査などが行われた記録は見つかっていない。神社周辺がいつから遺跡として認識されるようになったか調べてみると、『新修荒川区史』（昭和 30 年発行）に、縄文土器時代の「包含地」（土の中に遺物が確認できる状態）として諏方神社が確認できる。

この他、昭和 37 年に行われた東京都の調査では、区内の遺跡は道灌山遺跡のみだったのが、10 年後の 47 年に実施された調査では、諏方神社・南泉寺（西日暮里三丁目）が、遺物の「散布地」として、また延命院貝

塚が「貝塚」としてあらたに挙げられている。

しかし現時点では、近代に考古学者が諏方神社を訪れたという報告も見つかっていない。調査も発掘の記録も無い、いわば幻の遺跡である。それならば、なぜ、縄文時代の遺跡となつたのだろうか。

延命院貝塚の石斧 昭和 11 年の『荒川区史』を見ると、延命院貝塚から出土した縄文時代のものと思われる石斧などの石製品が諏方神社に奉納された時の写真がある。延命院貝塚は、大正時代にはどこにあるのかが不明になつてしまつたことから、恐らく明治時代に調査された遺物が板に貼られ、奉納されたのである。

残念ながら現在ではこの石製品の所在が不明である。しかし、これらが諏方神社にあったということは、この場所が遺物の包含地であること、なにかしらの関連性を示しているのかもしれない。



諏方神社に奉納された石斧

つけることはできなかつた。

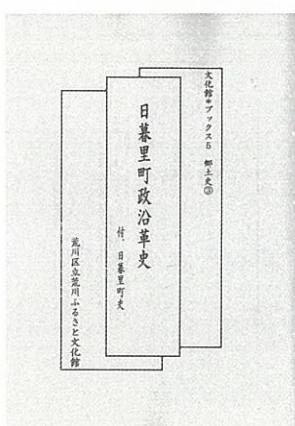
台地上に位置する地形や、近くで行われた 3 箇所の発掘調査で、弥生時代から古墳時代の住居跡が 3 輛見つかっていることからも、諏方神社境内から遺跡が見つかつても不思議ではない。周辺地域をはじめ、今後の調査によつて、より詳細な包蔵地「諏方神社」の姿が見えてくるであらう。

街中でも時々、土の表面から遺物を発見し観察することができる。外を歩くときは前を見て、下を見るときは、くれぐれも立ち止まつてから観察を。

（八代和香子）

《参考文献》『東京都遺跡地図』（昭和 40 年、東京都教育委員会発行）、『東京都遺跡地図』（昭和 47 年、東京都教育委員会発行）、『荒川区史』（昭和 11 年荒川区発行）、『新修荒川区史 上』（昭和 30 年発行）

文化館でお買い物



¥760

『文化館 * ブックス』第 5 弾。幻の日暮里の町史がついにお目見え。収録している『日暮里町政沿革史』は、今から約 80 年前に出版された本ですが、ほとんど知られていないなかつたため、今日的には、『新しい』歴史情報が許されるならば、当時こうした遺跡に発掘にやつてきた人びとのなかに、実際に諏方神社の境内からも土器を発見した人があつた可能性も考えられる。しかし、実際の遺物が存在しない以上、もうひとつ可能性として、先に紹介した諏方神社に奉納された石製品の存在により、同社が「包含地」として扱われるようになつたとも考えられよう。

観察の結果さて、地面を観察しながら境内を歩き回ると、実際に遺物がいくつか見つかった。しかし、これらは近世より新しい時代の灯明皿や土製玩具のカケラで、今回は縄文時代等の古い時代の遺物を見